

平成27年度 学校評価総括評価表

徳島県立徳島視覚支援学校

(1) 重点課題

視覚支援学校と聴覚支援学校が、「つながる」を合い言葉として連携・協働することにより、「幼児・児童生徒の夢と希望につながる保育・教育」を推進する。

- ① 学びがにつながる
視覚支援学校と聴覚支援学校で学ぶ幼児・児童生徒が、互いに認め合い、ともに高め合う保育・教育を推進することにより、豊かな心を育む。
- ② 未来につながる
幼稚園から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。
- ③ 地域とつながる
特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある乳幼児から児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をとおした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。
- ④ 心がつながる
思いやりと支え合いの心に満ちた人間性豊かな社会を築くため、学校と保護者、地域、関係機関・団体等が連携し、視覚障がいに関する理解の推進に努める。

(2) 重点目標

- ① 視覚障がい教育に関する研修と公開授業、OJTによる授業力の向上等により、教職員の専門性を向上します。
- ② 点字教材と触察教材の充実を図ることにより、一人一人の見え方に対応した教育を推進します。
- ③ 支援機器等教材の活用に関する研究をとおして指導方法の充実を図ります。
- ④ 特別支援教育センターとしての機能を十分に発揮するため、乳幼児教育相談や通級指導教室を設置する等、視覚障がい等のある乳幼児から児童生徒に対する専門的な支援を全県展開します。
- ⑤ 幼児・児童生徒一人一人の人権を最大限に尊重するとともに、全教職員がいじめのない学校づくりに努めます。□
- ⑥ 幼児・児童生徒の発達段階をふまえたキャリア教育の推進を図ります。
- ⑦ 視覚支援学校と聴覚支援学校の幼児・児童生徒および教職員が、安心・安全な学校生活を送るための環境設定やルールづくりを推進します。
- ⑧ 聴覚支援学校との共同学習や行事への参加等により、ともに学ぶ教育の構築に向けた取り組みを推進します。
- ⑨ 防災避難施設として、地域の人々と連携した防災訓練等を行います。
- ⑩ 生涯学習の拠点として、視覚障がいのある人の活動を支援します。
- ⑪ 奉仕活動や環境・エネルギー活動、啓発活動をとおして、地域とのつながりを深めるとともに、視覚障がいに対する理解の推進を図ります。

重点課題	①学びがにつながる				
	視覚支援学校と聴覚支援学校で学ぶ幼児・児童生徒が、互いに認め合い、ともに高め合う保育・教育を推進することにより、豊かな心を育む。				
重点目標	⑦視覚支援学校と聴覚支援学校の幼児・児童生徒および教職員が、安心・安全な学校生活を送るための環境設定やルールづくりを推進します。				
	具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
	寄宿舎	<ul style="list-style-type: none"> ・舎生の実態を把握するため、学級担任、歩行訓練士と、年間5回以上情報交換をする。 ・歩行訓練士に依頼し、年間3回以上の歩行訓練を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各寄宿舎担任が、学級担任、歩行訓練士と舎生の見え方等について、年間5回以上情報交換した。また舎生一人ひとりの眼疾患や生活面での留意点について、研修を実施することで、舎生の実態も把握した。 ・3学期に夜間の歩行訓練を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家である建築士の方から、段差を解消する手立てや移動での安全面等について、アドバイスやヒントをもらうとよい。具体的には、「阿波グローバルネット」という組織がある。鳴門市役所や図書館でも障がい者が使いやすい設備になっているかを年1回チェックしてコメントをもらっている。講習会もあるので、使えるのではないかな。
	教務課	<ul style="list-style-type: none"> ・両校話し合いまでに、各学部で2回以上検討会を持ち、必要な時間数や希望曜日等について意見をまとめておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度の教育課程が決定し、各学部にて授業展開のグループ編成等を検討している。聴覚支援学校との話し合いに向け、必要となってくる使用教室についての洗い出しや検討を行っており、学年末までに学部・学科会等で2回以上の検討会を実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の計画で不便であった部分については、より有効な教室活用が行えるよう教務課が窓口となって、教科担当者を中心に話し合いを持てるようにしたい。また、体育館およびグラウンドについては、放課後の外部による活用も増えてきているので、体育科とも連携を図り、スムーズな運用に努めたい。

重点課題	①学びがつながる				
	視覚支援学校と聴覚支援学校で学ぶ幼児・児童生徒が、互いに認め合い、ともに高め合う保育・教育を推進することにより、豊かな心を育む。				
重点目標	⑧聴覚支援学校との共同学習や行事への参加等により、ともに学ぶ教育の構築に向けた取り組みを推進します。				
		評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
具体的な活動計画	評価指標	評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
幼稚園	・聴覚支援学校の幼稚部の幼児とかかわり合う保育活動を実施する。	・自由遊びでの自然なかかわりを含め、季節の行事や日々の保育活動等での意図的なかかわりを年間8回以上実施する。 ・両校に共通する大きな季節行事等は、事前に取り組み方を情報交換し、連携をする。	・1学期にさつまいもの苗植えやプール、2学期にいもほりや楽焼き等を一緒に活動し、12回程度かかわり合う活動を実施した。特に同じ年中組の友達のかかわりを多く取ることができ、ふれあいの中で笑顔が見られたり、子どもたち同士でのかかわりが見られたりした。 ・1年間の行事や保育のおおまかな情報交換を行い、七夕やプール、文化祭等の取り組み方を情報交換し、教材等を貸し借りした。	A	・同じ学年の年中組の友達とのやりとりを中心に行うことで、お互いに意識をしたり、かかわりを持ったりすることができた。来年度は、本校幼稚部が2学年になる予定なので、全体での交流と同じ学年同士の友達との交流の場面を意識的に設けていきたい。
	・互いの保育のねらいを知り、聴覚支援学校の保育の参観をする。	・両校の教員が、幼児や保育についての話し合いを年間1回以上行う。 ・幼稚部教員が、聴覚支援学校の保育を年間3回以上参観する。	・3学期に両校で幼児や保育についての話し合いを行った。 ・年間3回(6月・9月・12月)、聴覚支援学校の保育の様子を参観した。		・お互いの保育の参観をすることで幼児の普段の様子や聴覚支援の先生方の幼児へのかかわり方を知ることができ、交流するにあたって大変参考になった。来年度も参観をしたい。 ・保育のねらい等をあらかじめ知っておくために、保育計画や学部だより等を交換するようにしたい。
小学部	・聴覚支援学校小学部との親交や相互理解を深めるため、交流及び共同学習を実施する。	・年間3回以上の学年交流や共同学習、聴覚支援学校の行事への参加等を行う。 ・交流の場面では、それぞれの児童がそれぞれの方法で、聴覚支援学校の児童とコミュニケーションができる。	・聴覚支援学校文化祭の見学、学年給食交流を4回、学部行事での共同学習を3回実施し、親交を深めることができた。 ・給食交流では児童同士で名前を呼び合う場面がみられた。また、自分の苦手な食材を食べる児童のことで、自分もがんばろうとするなど、交流を重ねる度、親交の深まりが感じられた。	A	・在籍児童で同年齢の児童が少なく、同学年との交流に苦勞があるようだ。たとえば地域の小学校との交流で総合学習の班分けで年齢の近い児童と接する場を設ける等すればよいのではないかと。 ・次年度は、在籍児童の最高学年が4年生となるため、高学年の児童としての交流をすることになる。そこで、児童も交流の運営に関わることができる計画を作成し、実施することが課題である。 ・1年生は体調等の都合により、なかなか交流に参加できなかったため、次年度は体調を整えて少しでも多く交流に参加することが課題である。

中学部	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚支援学校中学部の生徒との学習における交流を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科での交流及び共同学習や、栽培及び収穫活動等による交流を年間2回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの教科担任が事前に十分に話し合いを行い、総合的な学習の時間では「服のチカラ」プロジェクト活動として計5回、第1学年を中心に理科2回、国語1回の合同授業を実施した。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・両校の教員が、それぞれの生徒の実態をふまえ、一年の指導計画を見通した計画をたてる。また、生徒だけでなく、教員間でも互いの障がいについて学び合う機会をもち、活動の事前の話し合いを密に行った上で実施し、事後にはふり返りを行うことで、次回の指導に活かせるよう取り組む。 ・合同行事の実施や互いの行事への参加は、難しい面もあるが、給食交流は、他学部との調整も行いながら継続したい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚支援学校中学部の生徒と行事交流を通して、ともに協力して活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化祭や地域の清掃奉仕、給食交流等、さまざまな活動を計画し、学期に1回以上ともに活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の給食交流では、教員の支援を受けながら互いに会食を楽しんだ。 			
高等部 普通科	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚支援学校高等部の生徒とともに、城南高校文化祭の展示の部に参加し、聴覚障がいと視覚障がいに対する理解啓発を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両校の生徒達が協力して展示物の運搬や配置など会場準備を行う。当日は、来場者に資料を配付したり説明をしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休みに、両校の普通科2年生が集まり話し合いをし、計画的にちらし作りなどを実施した。また、城南高校文化祭当日には、城南高校の人権委員の生徒達とも協力してちらしの配布を行い交流を深め理解啓発を行うことができた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・次年度も参加に向けて、両校で年度当初に話し合いや準備日などの日程を検討し、城南高校の担当教員と連携を図りながら計画を進めたい。

生徒活動課	<p>・学校行事等について、聴覚支援学校との交流ができるよう計画を立て、ともに学ぶ教育の機会を設ける。</p>	<p>・第41回中国四国地区盲学校弁論大会校内選考会、平成27年度文化芸術による子どもの育成事業、文化祭、などの学校行事等において、聴覚支援学校と年3回以上の交流が実施できるよう計画する。</p>	<p>・第41回中国四国地区盲学校弁論大会校内選考会では、聴覚支援学校の児童生徒を招き、平成27年度文化芸術による子どもの育成事業、文化祭、などの学校行事等において、年3回以上の交流の場を設けて、ともに学ぶことができた。</p>	A		<p>・交流及び共同学習により聴覚支援学校との連携を深めることができたが、連携を途切れさせることなく、共同学習や各行事で交流の場を設け、ともに学ぶ教育を実現する。</p>
寄宿舎	<p>・視覚・聴覚の合同避難訓練を行い、緊急時に安全に避難できる体制を整える。</p>	<p>・両校合同で地震・津波、火災、不審者を想定した避難訓練を、年間3回以上実施する。 ・避難訓練後に両校児童生徒、教職員からアンケートを取って課題点を探り、改善を図る。</p>	<p>・今年度は合同で地震・津波避難訓練と火災避難訓練を実施した。毎回アンケートで課題点を探り、避難経路にライトや滑り止めマットを設置したり注意喚起テープを危険箇所に貼って、環境改善に努めた。また、舎生同士で協力して避難できる方法も練習した。3学期には職員を対象にした、不審者対応訓練を実施した。</p>	A		<p>・全職員が避難訓練を体験し、危機意識を高めるとともに、緊急時に安全かつ迅速に避難できる技術を身につける必要がある。特に夜間は宿直の職員が少ないため、舎生間でも協力して安全に避難できる方法を考え訓練したい。不審者対応訓練については、次年度は舎生も含めた内容で計画する。</p>

重点課題	②未来につながる 幼稚部から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。					
重点目標	① 視覚障がい教育に関する研修と公開授業、OJTによる授業力の向上等により、教職員の専門性を向上します。					
	具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
研究・情報課	・視覚障がい教育の専門性向上のため、「視覚障がい教育の基礎基本を踏まえた授業実践」をテーマとするグループ研修を年間9回実施する。	・点字(基礎)・点字(活用)・歩行・教材研究・ICTのうち、所属するグループの研修内容に関する専門性が向上したかどうかのアンケートを実施し、80%の教員から「向上した」との回答を得る。	・グループ毎に年間9回の研修計画を作成した。2学期末現在、9回の計画のうち計画通りに8回が実施でき、9回目は1月に実施する予定である。複数学部の教員が全グループに分かれて構成されていたことで、学部間の交流の場にもなり、実践事例や教材・教具、指導方法など教育の幅を広げる有益な研修となった。2学期末に行ったアンケートでは92%の教員から「研修内容に関する専門性が向上した」との回答を得ることができた。		A	・教員の希望に添いつつも、全グループとも複数学部の教員で構成し、視覚障がい教育としての指導方法や実践事例等を幅広く研修できるようにする。 ・次年度も学校行事などに重ならないよう、日程に配慮しながら計画的に研修を実施したい。
教務課	・点字使用生徒に対し、チームティーチングによる授業が行えるよう時間割編成および時間割変更を行う。	・2学期末のアンケートにて「年度当初より、点字使用生徒に対する授業力が向上した」と70%以上の教職員が回答する。	・日々の時間割変更において、できるだけ授業に支障がでないよう変更作業には取り組んで来た。これらを受けて、授業担当者に『点字使用生徒に対する授業力向上』を問うアンケートを行った結果、70%以上の職員が「授業力が向上した」との回答であった。		A	・OJTに配慮した時間割編成を実施し、チームティーチングによる役割や教材準備等も含めて「授業力の向上につながっている」という結果も得られているので、次年度も同じような形での時間割編成を考えていきたい。

重点課題	②未来につながる 幼稚園から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。				
重点目標	②点字教材と触察教材の充実を図ることにより、一人一人の見え方に対応した教育を推進します。				
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
中学部	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の実態や学習内容に応じた点字教材や立体、半立体教材を作成し、授業に活かす。 「点字等教材作成」担当教員と連携し、年間10個教材を作成する。 教材を使用した後、「自作教材シート」にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 国語では1個、社会科では10個、英語では1個、数学では3個、保健体育では4個、道徳では2個、理科では2個、美術では5個の触察教材を作成した。うち、教材作成担当教員と連携して作成した教材は6個である。点字教材は、各教科において、教材作成担当教員と連携しながら日々作成しており、授業で活用した。 これらの教材は、教材シートにまとめ、イントラにアップした。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 様々な教科で立体、半立体教材等を作成し、学習に活かすことができた。また、「点字等教材作成」担当教員と連携して作成も行ったが、より一層連携できるよう計画的に取り組みたい。 点字教材は、日常的に作成できたが、点字のレイアウトを考慮した点訳前のデータが作成できるよう作成のポイントを整理し、各教員の専門性が高まるよう努めたい。また、今後試験問題の点訳方法について、さらに研修を深めながら実施していきたい。

重点課題	②未来につながる 幼稚園から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。					
重点目標	③支援機器等教材の活用に関する研究をとおして指導方法の充実を図ります。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
研究・情報課	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器の有効活用による指導の充実を目指し、ICTを活用した公開・研究授業を延べ5回以上計画・実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ICTを活用した公開・研究授業を80%の教員が参観し、コメントシートを通して授業者との意見交換を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 支援機器等教材の活用において、ICTサポーターの技術的支援を受け、ICTを活用した6回の研究授業および1回の公開授業を実施し、全員の教員が研究協議に参加し、授業者との意見交換を行った。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 次年度以降、ICTサポーターが不在となることでトラブルに即応できないと予測されることが課題である。今後、技術的支援を得るために、総合教育センターなどの関係機関との連携強化を図りたい。

重点課題	②未来につながる 幼稚部から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。					
重点目標	⑥幼児・児童生徒の発達段階をふまえたキャリア教育の推進を図ります。					
	具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
人権・ キャリア 教育課	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部から高等部におけるキャリア教育年間計画を教職員の共通理解のもとに推進し、勤労観や職業観を育み、本人や保護者の希望がかなえられる進路実現をめざす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚部・小学部は、勤労観の育成のためチャレンジウイーク実施率を90%以上に設定する。また、今年度から個人ファイルを作成し、内容について学部会において情報の共有ができるようにする。 ・中学部は、総合的な学習を活用し、身の回りの施設や環境について各自にあった方法で調べ、学期に1度は、学習成果を発表する。 ・普通科は、一人1回以上の事業所見学か就業体験を実施する。 ・専攻科は、1年生の校内実習見学、2年生の治療院見学、3年生の治療院実習と職業観を育成する。卒業後の業界参加がスムーズに移行できるように、見学先や体験先の開拓を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度より個々のファイルを用意し実施内容が経年で確認できるようにした。夏季休業中を利用し100%の実施ができた。 ・1学期は、身の回りの施設や環境について学習成果を発表した。2学期は、総合的な学習の時間を利用し、服のチカラプロジェクトや文化祭の劇を成功させることができた。 ・4名のうち3名の実施が2学期までに終了し、残る1名も3学期に実施した。 ・2年生は県内事業所見学を終え、夏季休業中に関西方面の治療院見学を実施した。1年生については、校外臨床実習の見学をするなど、文化祭での実習をアシストすることができた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・保護者と連携し、学習課題の中から生活に繋がる課題を提案し継続実施する。 ・ケース会議や中高連絡会(教科間の連携)を通して、学習環境や学校生活の充実を図る。また、自身の学力を客観的に捉えることのできる基礎学力テストなどの受験を支援し、進路実現に向けての自己理解に努めさせる。 ・就業体験の位置づけについて保護者理解を促し、就業体験を継続実施する。 ・県内事業所における見学先の拡大を行い、生徒への提供情報の充実をはかり卒業後の選択肢の幅を広げる。
高等部 職業学科	<ul style="list-style-type: none"> ・治療院や病院でのキャリア実習を計画・実践し、職業人として必要なスキルを身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業学科「個別のキャリア教育学習プログラム」を活用し、1学期に職業人として必要なスキルについて教員が評価する。2学期の実習後に再評価し、すべての生徒の評価が上昇する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての生徒の評価が上昇とならなかった。10項目ある評価項目を平均すると、上がった生徒が75%、下がる生徒が25%だった。上昇した生徒が多かったが、一部下がった生徒がいた。下がった生徒については、実習等を重ねるにつれて、生徒への指導内容が増えてきたため、評価を下げざるを得なかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的にどうしてB評価となったか。(達成度が下がった生徒が8名中2名。初年度の生徒で、実習を重ねるにつれ課題が増えてきたため達成度が下がったと思われる。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価が下がった生徒だけでなく、上がった生徒に対しても、より医療人としてふさわしいキャリアスキルを身につけさせるため、次年度以降も本校が作成した「個別のキャリア教育学習プログラム」を活用して、医療従事者として必要なキャリア指導を行っていきたいと考える。

重点課題	③地域とつながる 特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある幼児・児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をとおした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。					
重点目標	④特別支援教育センターとしての機能を十分に発揮するため、乳幼児教育相談や通級指導教室を設置する等、視覚障がい等のある乳幼児から児童生徒に対する専門的な支援を全県展開します。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
サポート課	・乳幼児教育相談や通級指導教室のニーズを掘り起こすため、教育、医療、保健福祉、療育等の各機関を通じて広報を行う。	・県内全域の30以上の関係機関に、利用者等へのチラシの配布を依頼する。	・12月末現在で31の関係機関や研修会等参加者へのチラシの配布を行った。1月以降、2つの研修会で配布する予定である。 ・徳島市は、教育研究所及び保育課の協力で、市内全域全ての保幼小中高にチラシを配布した。	A		・医療機関は眼科中心に広報を行ったが、発達に障がいのあるお子さんの相談ニーズが高かったため、小児科へも広報する。 ・乳幼児教育相談のニーズはあるが遠隔地なので行きづらい、という話を聞いたので、チラシに巡回相談についても記載し、訪問による教育相談を検討する。
	・地域の学校において行われる、視覚障がい教育や視覚障がいについての啓発活動を支援する。	・地域の教員に向けての視覚障がい教育や啓発活動についての研修を4回以上行う。	・次の6回の研修会を本校主催もしくは本校を会場に開催して、講師を担当した。また、各種事業を利用して、県外から講師を招いて研修会を開催した。 ・弱視学級担任者研修会(6/4) ・地域研修会「視覚障がい理解授業の進め方」(7/28) ・弱視教育地域研修会(8/26, 8/28) ・徳島市名東郡特別支援部会研修会(8/3) ・徳島市教育研究所施設見学及び研修(8/17) ・地域研修会「WAVESについて」(2/6)			・今年度のアンケートや相談実績等から、地域の学校におけるニーズを検討し、より役立つ研修内容とする。 ・研修講師が巡回相談員に偏りがちなので、あいれんじゃー(校内人材バンク)を活用したり、外部の関係機関と連携したりして、巡回相談員の負担を軽減するとともに幅広い研修内容を提供できるようにする。

重点課題	③地域とつながる 特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある幼児・児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯とおした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。					
重点目標	⑨防災避難施設として、地域の人々と連携した防災訓練等を行います。					
具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策	
渉外・安全課	・地域の防災避難施設としての役割を果たすため、地域住民や聴覚支援学校と連携した防災訓練を行う。	・町内会長や、自主防災組織など地域住民と密に連携を図り、地域住民や各校の幼児・児童生徒の防災訓練参加者が40名以上となる。	・聴覚支援学校の担当職員と10回程度、地域の担当者とは4回の話し合いを行い、防災訓練の計画を立てた。当日の参加者は130名近くになり、大変多くの方が参加した。起震車体験、消火訓練、三角巾の使い方の講習、津波避難訓練、炊き出し訓練を各班や合同で行うなど、全員熱心に、取り組むことができた。	A	・防災の中で、交通安全ということも力を入れて取り組んでもらいたい。「地域とつながる」ということで、たとえば城南高校等、地域の人と一緒にマネジメントをしてもらうことで、視覚や聴覚に障がいのある人は通行するときに危ない場面や環境があるということがわかるだろう。	・防災訓練では、参加人数が多くなり、三角巾の講習のような、1人1人に丁寧に教える必要がある訓練は、時間がなく難しかった。また、幼児・児童生徒、教員は、事前に班編成をしていたが、本当の避難の時のように、その時に、班を編成した方がよいのか、考える必要がある。また、そのためにも、避難時にすることの、マニュアルを作る必要がある。 ・本校は車いすやバギーを使用している幼児・児童生徒が多いため、火災避難訓練、地震津波避難訓練では介助に駆けつけの人等、事前に多くの役割を決めていた。しかし、実際に災害が発生した際の避難を考え、その場で役割を決められるような体制や、マニュアルを作る必要がある。また、緊急用の滑り台が雨天時はとても滑りやすく、使用すると、とても危険なことがわかった。どのようにしたら、安全に滑り降りることができるか、対策を考える必要がある。 ・不審者対応訓練では、幼児・児童生徒が、学習しているときに、訓練をしてはどうかという意見もでたが、幼児・児童生徒への心理的な悪影響も考えて、これからは教員のための訓練にしていきたい。
	・聴覚支援学校と連携を図り、防災訓練(火災、地震・津波、不審者対応)を行う。	・聴覚支援学校と連絡を密にして計画を立て、年3回以上合同で防災訓練を行う。訓練を通して、緊急時の避難に際してのより細かな課題点を探る。	・1学期は火災避難訓練を行った。聴覚支援学校と連携を取り、お互いに助け合いながら、避難することができた。 ・2学期は、不審者対応訓練と、地震・津波による避難訓練を、聴覚支援学校と合同で行った。 ・不審者対応訓練では、2名の不審者が学校に侵入して、2名がバラバラに動き、2カ所での対応の訓練となった。後の反省会で、上手な対応の仕方を警察の方よりアドバイスを受けた。 ・地震・津波による避難訓練では、西側の階段が使えないという想定で行った。屋上へ出られる中央の階段の混雑が予想されたが、慌てず、落ち着いて避難することができた。時間も、各校とも、7分以内で避難できた。			

重点課題	③地域とつながる 特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある幼児・児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をおした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。				
重点目標	⑩生涯学習の拠点として、視覚障がいのある人の活動を支援します。				
		評価		学校関係者評価	
具体的な活動計画	評価指標	評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
高等部 普通科	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館や博物館の活用をおとして、視覚障がいに配慮した事柄を提案し、自己の充実や生活の向上を図る。 ・美術館や博物館での見学やワークショップを年に3回以上実施する。 ・見学やワークショップの事前・事後に美術館や博物館のスタッフと話し合い、連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期は「美術1」の授業で、美術館所蔵の版画作品の鑑賞を行った。事前に美術館スタッフに版画用具の紹介を依頼し、作品鑑賞とともに用具の実物も見る事ができた。生徒からは、とても良い体験ができたとの感想があった。2学期は開館25周年記念の展覧会を鑑賞した。美術館スタッフを交え自分の気に入った作品や感想を発表した。また、この展覧会の中の体験型鑑賞コーナーで視覚障がいに対応する試みについて感想や意見を言う事ができた。3学期は美術1の授業内容「絵具を作る」という題材において美術館スタッフと連携して進めた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・重点目標の「生涯学習の拠点として」ということと内容の関連性はどんなことか。(視覚障害のある方が、美術館・博物館が使いやすくなるように、利用者から発信していくという意味合いで行った。) ・卒業生や視覚に障害のある方が、グラウンドソフトボール等で活用している等、視覚障害者の拠点であることをあらゆるところでPRしてほしい。 ・利用者以外の学生ボランティア等がグラウンドソフトボールのようなスポーツがあることを知るのにもよいので、実践を公開してほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「美術」の授業だけでなく、その他の教科でも積極的に美術館や博物館の活用を進めていきたい。年度初めの年間計画作成時に全体的な計画を立てたい。

重点課題	④心がつながる 思いやりと支え合いの心に満ちた人間性豊かな社会を築くため、学校と保護者、地域、関係機関・団体等が連携し、視覚障がいに関する理解の推進に努める。					
重点目標	⑤幼児・児童生徒一人一人の人権を最大限に尊重するとともに、全教職員がいじめのない学校づくりに努めます。					
	具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
生徒活動課	<ul style="list-style-type: none"> いじめのない学校づくりに向け、外部から講師を招聘し、全教職員を対象としていじめ防止の研修を実施する。 全教職員でいじめ防止に取り組むとともに、いじめの事案の発生については、早期発見と早期対応を行う。 いじめや犯罪に巻き込まれないために、在学中のみならず、卒業後も役に立つ知識が身につくよう、専門家を招き、各安全教室を3回開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実施後のアンケートにおいて、教職員の「いじめ防止の意識が向上した」という回答を70%以上得る。 いじめの事案の発生をとらえたときには、できるだけ早く事態を把握するとともに、生徒指導委員会等を通して解決に努める。 外部講師を招いて、携帯スマホ安全教室、交通安全教室、薬物乱用防止教室を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実施後のアンケートにおいて、教職員の「いじめ防止の意識が向上した」という回答を99%得ることができた。 今年度いじめの事案は発生しなかった。来年度も引き続き、いじめのない学校づくりに努めたい。 専門家を招き、6月12日に交通安全教室、7月9日に携帯スマホ安全教室を開催した。薬物乱用防止教室については、3学期に実施した。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、いじめのない学校づくりをめざし、研修や啓発に努めるとともに、万一発生の場合には速やかに対応し、再発の防止策を全員で考え実践する。
人権・キャリア教育課	<ul style="list-style-type: none"> 人権教育年間計画が効果的に実施できるように、指導案作成の研修を行い、ホームルーム活動や教科学習の充実をはかり、心豊かな人間性を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> 年間計画の実施について、評価欄の記入を学期毎に促し、年度末には90%以上の実施をする。 職員を対象とした指導案作成の研修を行い80%以上の満足度を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画に基づき、年度末には100%の実施ができた。 6月23日に研修を実施し、90%の満足度を得ることができた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 高人研大会にむけて本校の重点課題である「4つのつながる」に視点をおいた人権教育の授業展開を行う。 各学部で指導案を作成し、職員研修を企画し授業の充実をはかる。

重点課題		④心がつながる 思いやりと支え合いの心に満ちた人間性豊かな社会を築くため、学校と保護者、地域、関係機関・団体等が連携し、視覚障がいに関する理解の推進に努める。			
重点目標		①奉仕活動や環境・エネルギー活動、啓発活動をととして、地域とのつながりを深めるとともに、視覚障がいに対する理解の推進を図ります。			
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見	
小学部	<ul style="list-style-type: none"> 地域の商店に「点字ブロックの日」の啓発チラシ付きのティッシュを置いてもらえるよう依頼に行く。 3店舗以上の地域の商店に依頼する。 チラシ入りのティッシュを100個以上作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚支援学校の児童と共に啓発チラシ付きのティッシュ120個と啓発チラシを制作した。 3月18日の点字ブロックの日にちなみ、11月18日に聴覚支援学校の児童と共に学校近隣の4つの店舗を訪れ、啓発チラシ付きのティッシュを置いてもらうことができた。3月17日にも活動をした。 啓発チラシ付きティッシュは交流校の八万小学校や聴覚支援学校の児童にも配布して、広く啓発することができた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 視覚障がいへの啓発活動を続け、視覚障がい者にとっても安全な環境づくりを地域の方々と共に推進する必要がある。 啓発チラシ付きのティッシュを置く店舗や回数をふやして、点字ブロックへの啓発活動を継続していく。
高等部普通科	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚支援学校生徒と合同で、近隣や二軒屋駅周辺の清掃活動を行う。 「点字ブロックの日」前後に、城南高校生や本校と聴覚支援学校の保護者へちらし付きのティッシュを配り、点字ブロックへの理解啓発を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間とHRの時間に2回以上実施する。 清掃活動の中で出会う地域の人々に積極的にあいさつをする。 登下校の時間帯に5回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月10日と12月4日に、両校の高等部17名が2班に分かれ、二軒屋駅周辺のゴミ拾いを実施した。 清掃活動中、地域の方から声をかけていただきあいさつを交わすことができた。 3月18日の「点字ブロックの日」前後に正門前で城南生へ、生徒昇降口で両校保護者へ、当日には、徳島駅で街行く人々へ理解啓発のティッシュ配りを5回以上行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 両校合同での地域の清掃活動や点字ブロックへの理解啓発活動を、それぞれの役割分担を明確にし協力して行う。
高等部職業学科	<ul style="list-style-type: none"> 学校周辺の清掃活動を行う。 本校生徒が、臨床体験を通して地域住民とのふれあいの中で相互理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> 放課後等を活用して、年間3回以上実施する。 アンケートで75%以上の方が視覚支援学校の理解が深まったと回答する。 	<ul style="list-style-type: none"> 校外臨床実習等で近隣の会場への移動時などを活用し、合計3回の学校周辺の清掃活動を行った。 アンケートで約89%の人が視覚支援学校の理解が深まったと回答した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 奉仕活動などは職業人として必要なスキルであると共に、啓発活動は本校として必要な活動であるため、次年度も同様に活動を行っていきたいと考える。